

かわかみ通信 むすび

2022年5月
皐月号

回想、父 川上正志

この号が発行される頃コロナはどうなっているのでしょうか？ またウクライナはどうなっているのでしょうか？ 不安で、悲しい事ばかりの人の世ではあります。しかし私達は「木を植えねばならない」のだそうです。

さて今回は前回に引き続き川上季石の句碑巡りです。越前町鯉ヶ岬？ 銭ヶ浜園地にそれは建てられていました。

「涛音はふるさとの音水仙花」というものです。

帰りに、父が越前町に帰り仕事を始めた小樟集落の医院跡に立ち寄りました。ちょうど道端にご婦人が出ておられたので、いろいろお話を伺うことが出来ました。

父は小樟の小さな漁村から出て現北陸高校に入学。卒業後福井師範学校と金沢医専とどこかもう一つ合格し、本人は師範学校に入り教師になりたかったらしいのですが、助産師（そのころは産婆？）の姉に医専にと勧められたそうです。正確には覚えていませんが、高校、大学時代は柔道、バレーボールの選手として活躍したようです。のちに敦賀に住むようになってからもこの二つの競技には関わっており、そのご縁で体育協会立ち上げに関与することになりました。医専時代は戦争のただ中で、医専へという勧めもそのことが関係していたかも知れません。しかしそのような家族の思いを無視したかのよう、学徒出陣で船舶特攻隊を志願します。その後陸軍軍医学校の先輩に軍医への道に導かれ、広島にて終戦を迎えることになりました。当然原爆に遭遇しているわけで、新型爆弾が落ちたとの一報があったそうです。朝鮮王朝の皇太子が広島におられたようで、（戦国時代、今川家におられた徳川家康のような立場）その方も被爆され一番先に父のいる陸軍病院に運び込まれたそうです。その後広島に救援に入りましたが、それはそれは言葉に言い表せないほど悲惨な状態だったそうです。



学生時代の正志さん



軍医の正志さん

「原爆忌手当てかなわず無念の日」 きわむ
終戦後、大学に戻りましたが間もなく軍医は戦犯とされ公職追放となり、故郷の越前町小樟にて医業を開業することになります。この頃の小樟には水道はなく、毎朝の水汲みは大変だったと母から聞いたことがあります。先述のご婦人によれば、医業は水を沢山必要だからでしょうか、本当に水汲みはお辛そうでしたとのことでした。この事も原

因で敦賀へ出られたのではともおっしゃってました。

「手荒れるや一日の水汲み難し」 きわむ

母の故郷である敦賀へ出てきたのは、私の3歳の時だと思います。石などの運搬船にて越前町を後にしました。海沿いの道にはむしろ旗が立ったと母が申ししていました。越前町の方々が名残を惜しまれたのでしょうか。敦賀へは川崎の岸壁に着いたのではとうすら記憶しています。

敦賀では松原小学校の前で開業しました。とても忙しく働いていた記憶しかなく、家族旅行などとてもない事でした。しかしその時代はどの家庭でも同じだったのではないでしょうか？ その中でも既に始めていた



バレーボール選手時代の正志さん

俳句やバレーボールなどにも一生懸命でした。俳句のご縁で県文化協会の会長を務めたり、敦賀市の文化協会にも関わりました。一方子育て、家庭内の事は、母任せで住み込みの従業員の方々もおられたので、毎日の食事作りは大変だったろうと思います。父はお酒と宴会が好きで、年末年始はクリスマスパーティーに始まり、三が日は毎日百人をはるかに超えるお客さんが見えられ、私も接待係に出されていました。私が敦賀へ帰った、平成元年ころには、世の中のお祭り騒ぎムードはバブル崩壊とともに無くなり、ようやく家族水入らずの正月が出来る様になりました。また医院に関する煩わしいことから解放され、俳句や旅行など悠々自適の生活のように見えたのですがどうだったのでしょうか？ もともと忙しいのが嫌いではない父でしたから、退屈していたかもしれません。とは言え顔を見ないと思っていたら、青森まで民謡の師範の免許をとりに行ったりもしていたので時間を有効に使っていたのではないかと思います。私共が帰って少しでも父母が楽に老後を過ごせたのであれば何よりですが、どうだったのでしょうか？



民謡を唄う正志さん

それにつけても、母は大変だったろうなとあらためて、ご苦労様でしたと言いたい思いです。父母の心の中を伺い知ることは出来ませんが、皆様のご支援を頂き、充実した人生を大過なく終えることが出来たのではと振り返っています。皆様に心より感謝申し上げます。

「父の句碑涛音と共に菜花咲く」 きわむ

川上医院 院長 川上 究

つるがの細道

よたよた歩きの

奮闘記

第二十弾

かわかみきせきをめぐるまき

【川上季石を巡る巻パートII】

今回は「よたよた歩きの奮闘

記」のVol.54睦月号の続きで、「川上季石を巡る巻」パート2である。1面では宛先生の父上正志さんへの思い出と共に、2面ではいつものよたよた散歩をお届けしたい。前号では敦賀にある季石さんの句碑を見て回った。今号では正志先生の生家があった越前町の「銭ヶ浜（ぜにがはま）園地」駐車場に季石さんの句碑が建っていると以前新聞で見た記憶があったので、足を延ばすことにする。

そこまで、よたよた散歩と、いうわけにいかず、車でひとつ飛び。といっても、結構距離がある。出発して、1時間以上かけて到着。日本海を望む風光明媚なところにそれはあった。



入口にある立て看板

記事の後半には「越前海岸を愛し、風景と暮らしを詩に詠んだ南さんの詩碑が、自分の句碑と並ぶ地に落ち着いたことを川上さんも喜んでいるだろう。海を背景に並ぶ二基の碑を見て、文学を生み出す越前海岸の土壌を見たような気がした」と結んでいる。



季石さんの句碑。まあでかい。日本海をバックにハイパチリ

けつこう大きく立派な句碑にびつくり。「涛音はふるさとの音水仙花」季石、とある。その横には同町出身の南信雄さんの詩碑が建っている。越前町出身の文人二人の碑が並んだ。新聞



同郷の南信雄さんの詩碑が並んで建つ

こうしてみると晩年の正志さんしか知らない小生は、改めてすごい人だったのだと思ひ知らされた。冬は波が高く荒海だけれど、今は実に穏やかで静かな日本海だ。しばし、海を眺めながら正志さんに思いを馳せる。



モニュメント「水仙の郷」

句碑を後にして、少し走ると小樟（このぎ）という場所に出る。ここは川上正志さんが生を受けた土地であり、川上医院発祥の地でもある。Qちゃん「確かこちら辺と違うやろか」車を止め、少し歩いてみる。玄関前にご婦人が立っていたので「こちら辺で昔川上医院という病院があったのを、存じですか」と尋ねると、「ああそれやったら、すぐその建物やわ」さすがQちゃん記憶力がすごい。今の建物は現所有者の人が建て替えて、倉庫になつていふこと。その人の話では「昔こころは飲料水がなかって汲みに行くのが

大変で、奥さんが苦勞していたみたいやで」と話をしていた。その後敦賀に転居したとのことだった。正志さんの若いころ、この場所で川上医院最初の開院されたのか。Qちゃん感慨深い表情に耽る。



元川上医院があった場所

季石さんを巡る散歩を終え、帰途に就く車内で「あつ、あの場所ので俳句詠まんとかかんかったね」との問いに、Qちゃん即座に「詠んだで」とおっしゃる（句作は表面に掲載）。さつすが、早いね。あいにく小生浮かばず、撃沈。

それについても、出生地でこれだけ大きな句碑を建てるといふ文学思考というのは、それだけ正志先生が偉大ということだが、地域の文学者を顕彰する土壌が越前町にはあるということなのか。敦賀にもそういう文学を顕彰する考え方が根付いてもよいのだが。せつかく松尾芭蕉の杖置き地なのに。心地よい波風と共に越前町を後にするのであった。

以上



晩年の正志先生



まさに奇遇だ。今回行った越前町の句碑の横にQちゃんと同じ場所に立つ



これは貴重な写真。正志さんと父上。宛先生のお祖父さん

【発行】令和4年5月9日(月)
かわかみ通信むすびVol.56

医療法人 川上医院

福井県敦賀市松原町1-39

TEL: 0770-22-0977